大垣教会　礼拝　　説教原稿　　辻　幸宏
【申命記　連続講解説教】　「神の恵みと神の御言葉に生きる」　　６５

日　時：２０１８年2月２５日
説教題：「命と幸いをお与えくださる神」
聖　書：（旧約）申命記３０章

序.

先週、加納教会・中部中会・市内信徒会の皆さまをお招きして感謝礼拝を献げることが許されました。久しぶりの方々も来られました。また出席を願いながらも、出席出来ない方々も少なからずいたことを、伝え聞いています。

そして、今日、私たちは、この礼拝堂における最後の礼拝を献げる時となりました。人間的な寂しさを思います。橋谷先生の言葉の中に、「泣いて良いのだ」ということが語られました。葬儀も同様ですが、やはり悲しみがあり、それが無いかの如く、強がる必要はありません。それでもなお、私たちは、主がお語り下さる御言葉によって励ましを受け、一歩、前へと歩み始めることが求められています。

今日の最後の礼拝、そして２８日に行われる最後の祈祷会において、申命記の御言葉に聞くことと致します。毎月、最後の週に読み続けてきた御言葉の続きです。ルカ福音書が、神の国の約束をもって終えたのと同様に、罪の故に主の裁きが避けられないイスラエルにあって、なおも主の祝福と希望が与えられている御言葉から確認出来ることは、大垣伝道所に集う私たち一人ひとりにとっても相応しい御言葉ではないかと思っています。

Ⅰ. 立ち帰りなさい！

①背き続ける者は、必ず滅びる！

聖書には、「信じる者は救われる」と福音が語られる一方、呪いについても語られていることを、私たちは忘れてはなりません。それを象徴するのが、バビロン捕囚です。神によって立てられた王が、主に背き、イスラエルの民全体が主から離れていく時、主はイスラエルに裁きをもたらしました。それは主によってバビロンという国に王が立てられ、主の裁きとして、イスラエルが滅ぼされていくというものです。主に背き続ける時、**死と災い**から逃れることは出来ず、**必ず滅びる**のです。

②再チャレンジをお許しくださる主

しかし同時に、聖書において貫かれていることは、一度罪を犯せば、「もうダメだ、裁きだ」と語られることはありません。つまり言い換えれば、再チャレンジが許されているということです。2～3節 **あなたの神、主のもとに立ち帰り、わたしが今日命じるとおり、あなたの子らと共に、心を尽くし、魂を尽くして御声に聞き従うならば、あなたの神、主はあなたの運命を回復し、あなたを憐れみ、あなたの神、主が追い散らされたすべての民の中から再び集めてくださる。**

ここで大切なことは「**主のもとに立ち帰る**」こと、つまり**神さまの御前に立ち、罪の悔い改めることです**。申命記30章では３度語られています(2，8，10)。今まで、何も無かったの如くに再出発が始まるのではありません。主の御前に立ち、自らを顧み、罪を犯したという事実を、心の中に刻み込まなければなりません。

③自らの罪を確認し、信仰を顧みよ！

救い主の御前に立ち、自らの姿を顧みることは大切です。私という人間が、神さまの御前に立った時、救われるのに相応しい人間なのでしょうか。主の御言葉を語るのに相応しい働きを行っていると言えるのでしょうか。

主の御前に問われるのは、私たちの日々の生活における行い、口から発せられる言葉、心の中で考えていることのすべてです。何一つ、神さまの御前に隠し立てすることなどできません。

主の御前に、これらのこと一つひとつが吟味された時、私たちは、罪の刑罰としての死を避けて通ることなど出来ません。ヨハネ福音書８章で語られているように、姦通の咎で連れてこられた女の前で、主イエスは、**「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」**とお語りになりました(8:7)。この時、誰一人、石を投げることは出来ず、年長者から一人また一人と去って行ったのです。全的堕落、すべての者は生まれながらにして、そして日々の生活において罪を犯しており、自らの行いにおいては、神の救いに入ることなど出来ないのです。

罪を犯して、捕囚の民となるのは、何もイスラエルだけではありません。今の日本における宣教の腐心、そして世界においても同様のことが起こっていることは、私たち自身の信仰が問われている問題です。その最中に、大垣伝道所の閉鎖の問題があるのです。自分一人で責任を背負う必要はありません。しかし、私たち一人ひとりの信仰が問われている問題であることも確かです。

だからこそ、大垣のことは、ここまでの経過を改めて問われなければならない問題ですが、ここに至る結果を、私たちはなおも神の摂理であり、神の御業であることを、受け入れ、決議したのです。

Ⅱ．心を尽くして、魂を尽くして…

①律法主義になってはならない

そしてもう一つの視点が、「**心を尽くし、魂を尽くして**」ということです。２節において語られていましたが、改めて６節、10節においても語られています。「神の御声に聞き従う」こと、また「立ち帰る」こと、主により「命を得る」ことにかかります。

これはどういうことかと言えば、形だけ整えることは可能です。「神さまを信じます」という告白、「罪を悔い改めます。ごめんなさい」という悔い改めと謝罪、そして、律法に従うこと、十戒に従うこと、これらは形を整えることは出来ます。しかし、これは言い換えれば律法主義ですね。

②主の御前に何一つ隠し立ては出来ない！

主なる神さまが求めておられることは、形を整えることではありません。私たちの心、私たちの魂が、神さまの御前にあって、そうした行動を行っているかを、見ておられるのです。

私たちも、その人の行動、発言が、本心から行っているのか、形だけで行っているのか、ある程度観察していれば、察知することが出来ます。また長い間の行動を見ていれば、分かってくることです。

しかし、私たち人間は、その嘘が見破られないように行動しようとするずる賢さを身に秘めているのです。そのため、人を騙して、形だけ整えようとするのです。そして自らの正しさをアピールしようとします。

しかし、神さまの御前では、私たちは、何一つ隠すことができません。私たち一人ひとりの心が問われるのです。形だけ行っても、心が伴っていなければ、このことを神さまは咎められます。

③信仰は行いに表れ、主の御声に聞き従うことである！

私たちの信仰は、頭で理解することでもなく、形を整えることでもありません。信じたことを、体全体で受け止め、行動に出るのです。行いが伴わない信仰は、死んだも同然であるとヤコブが語るのは、このことです。このことを、申命記では、主の御声に聞き従うことであると語るのです。

Ⅲ. 礼拝に表れる信仰

①喜びと感謝抜きの礼拝は、つまらない！

この時、私たちの信仰は、礼拝行為にも表れてくるのです。今日も十戒を告白しましたが、主は私たちが安息日を守って礼拝することを求めておられます。そして教会においては、礼拝を厳守するように求めて来ました。しかし、永遠の生命の喜び、救いの感謝抜きに礼拝に集うことは、教会に来ることが非常につまらないことになるのです。

②恵みの手段としての御言葉・祈り・礼典

礼拝においては、もちろん、主がお語りになります御言葉、つまり聖書朗読と説教において、神さまによる罪の赦し、救い、永遠の生命の約束が示され、信仰の告白と救いの感謝に喜ぶことが出来れば、何より素晴らしいことです。

また祈りの恵みに満たされることもあります。苦しみの中にある時、祈っていただくことがどれだけの慰めとなることでしょうか。天地万物を創造され、私たちに生命をお与え下さる方が、聞いて下さる。それだけでも、心に平安がもたらされることがあります。苦しい時の神頼み、それは大切なことでもあるのです。

そして私たちは与りますが、主の晩餐があります。信仰告白を受けていない求道者、未陪餐会員は、配餐を受けることが出来ませんが、主はすべての人が、この晩餐に招かれ、天国における晩餐に集うことを願っておられます。主は「あなたはもう天国の住民なんだ、永遠の生命が約束されている、苦しみも悲しみもない平安と安らぎの毎日が与えられる」とお語り下さっているのです。

御言葉、祈り、礼典（主の晩餐・洗礼）の３つが、恵みの見える手段です。これらを通して、私たちは、神さまによる救いを確信して、喜びをもって、心と魂をもって神さまを礼拝するものへとされていくのです。

③聖徒の交わりによる豊かな教会形成をしよう！

しかし現実に、主のお語りになる御言葉による救いの喜び、祈りにおける慰めと平安、主の晩餐における救いの恵みに満たされていない人たちをもいるのは確かです。そしてそうした人たちも、主は教会へ、礼拝へとお招きくださっています。

この時、彼らにとって教会という場所が、どのような場所となる必要があるのでしょうか。この時に求められるのが、聖徒の交わりです。キリスト者とされた者たちが、神の愛、隣人への愛に生きる時、教会での交わりもまた、豊かなものとなるのです。

世における苦しみの生活を理解しようとすること（寄り添い）、共に祈ること、出来る範囲で援助を行い、助け合うこと、こうした聖徒の交わりがある所に、キリストも共におられ、教会の交わりが深まっていくのだと思います。「礼拝だ」、「伝道だ」と語られても、教会における兄弟姉妹としての豊かな交わりがなければ、教会は成長しないのです。互いが共に教会に集う隣人を理解し、苦しむ者と共に苦しむことが大切です。

そして、初めて教会に来た人たち、久しぶりに教会に来た人たちが、ここに自分の居場所がある、何だか安らぎがある空間であると思えることが大切です。

教会に久しぶりに来た人が、私に対して、「なかなか教会に来ることが出来ずにご免なさい」と謝られる人がいます。神さまにとって、そして牧師である私にとって、そういう人が教会に来て下さることは、喜びなんです。失われた羊が見つかり、帰って来た時です。先週も、久しぶりに教会に来て下さった方々がいました。一人ひとりゆっくりとお話しする時間はありませんでしたが、私自身、本当に喜んでいます。

教会は、久しぶりに来た人が、このような後ろめたさを覚えて、敷居を高くしてはなりません。初めて来た人が、そして久しぶりに教会に来た人が、「来て良かった」、「心に安らぎを得た」と思える場所を、教会の中に作っていかなければなりません。

このために、私たちは、私たち自身が繰り返し主のもとに立ち帰り、悔い改めること、そして心を尽くし、魂を尽くして主を信じ、キリスト者として歩み続けることが大切です。

私たちは、この大垣教会で礼拝を献げることは、水曜日の祈祷会が遺されているだけです。これから加納教会で、そして別の教会で信仰生活を歩みます。それでもなお、主がお与え下さった教会において、主を信じ、キリストの教会を私たちが立て上げようとする時、私たちの信仰をとおして、教会全体が変えられ、キリストの体として成長していくことが出来ると信じています。主を信じて下さい。そして心を尽くし、魂を尽くして、キリスト者として歩む時、主は豊かな実りを私たちにお与え下さいます。

（お祈り）